新書紹介

都市は未開である

マチノロジーの周辺領域

望月照彦著

創世記　一、二〇〇円

一八世紀に始まる産業革命以来、技術や産業の発展に支えられて形成されてきた近代社会も二十世紀後半を迎えて、今や、大きな曲り角に来ている。技術や産業の発展は、確かに便利で豊かな生活を我々に与えてくれたが、その反面、画一的で個性の欠けた生活や、都市の過密、公害といったさまざまな問題をもたらした。一時はバラ色の未来を夢みたものの、このような障害に出会い、人々は疲れ、いらだち、そして空しさを感じとってきた。本当の豊かさとは一体なんなのか、技術や産業の発達とは本当にいいものなのか、といった根源的な問いかけがいろいろなところで聞かれるようになり、ここにきて、従来の技術至上主義や豊かさのあり方などについての根本的な転換が迫られるようになった。そのような状況のなかからエコロジーやバイコロジーなどが出てきた。

副題にあるマチノロジーもその延長上と考えてよい。その意味で言えば目新しいものとは言えないかもしれない。本書は昭和五十二年に出版された「マチノロジー・街の文化学」の続編であり、そこで触れられなかった周辺領域についての評論集である。著者の提唱するマチノロジーとは、高度に発達した技術が集積している都市の中で、人間をどうみていくのかという視点から考えだされた「街学」である。

かつて著者は、都市開発会社で大規模団地の計画・設計に携わっていた。そこでは、ヒューマニティの欠落した個性のない物を造っていかざるを得ない職業人としての自分と、これでいいのかという疑問を持つ自分との葛藤があったようだ。当時、多くの建築家や都市計画者達は技術至上主義を持ってモダンなデザインのコンクリートジャングルを造り出していた。それらは現代文明の象徴であると同時に、無機的で味気ない生活を暗示するものでもあった。そんなある日寒々とした団地の風景の中に一台の屋台を発見したところから「街学」の研究が始まったと言う。

著者は、林立する超高層ビルとその下にへばりついている屋台の対比の中に、現代の都市や建築、そして計画学が欠落させている大切なものをみたのだ。はじめは盛り場における屋台の調査研究から始まり、やがて対象は、都市学者達から見捨てられたうす汚い存在である露店、辻占い、横丁、呑み屋街へと広がっていった。さらに研究は「団地」「地下街」「繁華街」「下町」等へと進む。「マチ」という人間の行動や意識を基にしたヒューマンスケールの空間を設定し、そこにおける人間の生活を把握しようというところからマチノロジーが生まれた。この中で「団地」や「地下街」は当然のこととして、否定的に取り扱われている。

本書は「都市への探検」「隠された構造」「未開のユートピア」という三つの章からなり、全編を通して人間に対する暖かいまなざしが感じられる。著者は学生時代、文芸部で活動しており現在も童話集などを書いている。文学とは人間研究であり、そのような文学に関わってきたことが、マチノロジーの誕生の背景にあることは確かだ。

都市とはそもそもなんなのか。そして都市の巨大化とは、都市の発展とはなんなのか。都市の現象的把握だけでなく、哲理そのものにせまろうと著者は模索している。まさに都市は未開なのである。文化人類学の手法を使って、この未開地の中に、隠されている構造を発掘しようというのだ。間の研究、嗅覚空間論、コミュニティ論など、面白い断面をみせてくれる。コミュニティ論では、血縁と地縁によって鎖された共同体からの脱落者としての都市生活者にとってのコミュニティの可能性を探る。そこでは、血縁や地縁というあらかじめ用意された縁ではなく、街人として街の中に知己を求める「知縁」を媒介としたコミュニティを考えている。知縁社会では、同じ感性、意識を持っていれば、街の中で隣りにいる人間が友人となる。そして盛り場には、知縁のための装置が準備されているのだ。最近はやりのシティボーイなども著者のいう街人としての出現といえるだろう。

マチノロジーは現代文明に打ち込まれた楔である。そのすき間の奥に垣間見られるユートピアの実現は、都市計画の中でマチノロジーがどのように具体化されるかにかかっているといえよう。

〈都市科学研究室　多根雄一〉